

## 令和7年度第2回米子市総合教育会議 議事概要

### ■日時

令和8年2月18日(水) 午後2時から午後3時30分

### ■場所

米子市役所本庁舎5階 議会第2会議室

### ■議事

- (1) 英語教育について
- (2) 小中学校の水泳授業について
- (3) コミュニティ・スクールの推進について

### ■出席者

市長 伊木 隆司  
教育長 浦林 実  
教育委員 白井 靖二  
教育委員 荒川 陽子  
教育委員 塩地 淳子  
教育委員 永井 善郎

### ■出席職員

総合政策部長 佐々木 俊二  
総合政策部次長兼総合政策課長 中本 教聖  
総合政策部総合政策課総合戦略室係長 亀尾 令奈  
教育委員会事務局長 長谷川 和秀  
こども政策課長 永榮 一博  
こども政策課担当課長補佐 佐藤 祐佳  
教育委員会事務局次長兼こども施設課長 矢野 伴典  
こども施設課課長補佐 前畑 昇吾  
教育委員会事務局次長兼こども支援課長 長尾 理恵  
教育委員会事務局次長兼学校教育課長 仲倉 昭雄  
学校教育課課長補佐 平野 勝久  
学校教育課担当課長補佐 鉄尾 知史  
学校教育課担当課長補佐 三代 涼子  
生涯学習課担当課長補佐 松永 沙由里  
生涯学習課主任 前田 はるか  
学校給食課長 長谷川 百合子  
文化振興課長 大塚 一平

■傍聴者数

0人

【議事概要】

■議事（1） 英語教育について

英語教育について、資料1に沿って所管課（学校教育課）から説明。

【委員意見】

- 「EnglishPark」のような学校外での体験は、学習意欲の向上に非常に効果的である。海外派遣については、現在1名いらっしゃるオーストラリア出身のALTの方を、準備段階からぜひ活用していただきたい。また、オーストラリアは時差が少ない点が、派遣後もオンライン交流などを続ける上で大きな強みになると考える。  
⇒業者と調整し、当該ALTの活用を含めて充実させていきたい。（学校教育課）
- 英語教育は、かつての文法・読み書きを重視したものから、コミュニケーション重視へと大きく変化している。英語学習の開始時期が中学校から小学校に前倒しされているが、より低年齢から英語と触れ合い、英語が「日常」にある環境づくりが必要である。そして小学校のALTとの交流、中学校の海外派遣など、英語に触れる場を増やすことにより、英語が日常的なコミュニケーションの手段となるような機会の提供ができると良い。
- 「EnglishPark for Students」を見学し、子どもたちが勉強の枠を超え、人と人との関わりの中で生き生きと学ぶ姿がとても印象的だった。特にALTが積極的に褒めてくださることから、子どもたちが自信を持って発言できていた。より多くの言葉を浴び、英語に触れあう機会を増やすためにも、現在の年1回程度から実施回数を増やすとともに、ALTの増員をお願いしたい。
- 各校への訪問を通じ、タブレット端末が個々の学習進度に応じた「聞く・話す」学習に有効活用されていることを確認した。今後、生成AIの活用も更に進めていただきたい。海外派遣については、子どもたちにとってワクワクするような計画である。派遣のみならず、例えば給食で「オーストラリアウィーク」を実施し、参加できない小学生も現地の食文化に触れる機会を作るとともに、「中学生になったら自分も行きたい」と夢を抱けるようなきっかけ作りを検討していただきたい。将来的には、双方のホームステイ受け入れや姉妹都市提携も視野に入れ、日常的に異文化に触れられる国際的な地方都市としての将来像を期待する。
- 給食などで食文化の違いを知る機会を作るのは、良い案だと考える。

【市長】

- 「EnglishPark for Students」について、ALTの増員、実施回数や方法など、既存のリソースで工夫できることがあるかを含め、検討を進めていく。
- タブレット端末の活用については、リスニングではソフト面を含め有効な導入形態を引き続き研究し、読み・書きでは紙の教科書というように「いいとこ取り」ができるハイブリッドな運用を検討していく。
- 派遣事業にとどまらず、日本の文化を正しく理解し相手に伝える視点も重視したい。また、給食メニューの導入も検討の余地がある。現在、皆生ライフセービングクラブを通じたゴールドコーストとの交流実績もあることから、姉妹都市提携などの可能性も含め、継続的な交流の場を構築していきたい。

## ■議事（２）小中学校の水泳授業について

小中学校の水泳授業について、所管課（こども施設課）から資料２に沿って説明。

### 【委員意見】

- 綿密な事前準備の上、計画どおり実施できたことを嬉しく思うとともに、猛暑の中、水泳授業ができなかったことを考えると良い取組である。一方で、既存のプールを使用する学校における指導力の向上のための研修や暑さ対策はしっかり行っていただきたい。また、「泳げること」は命を守ることにつながることから、「泳げること」につながるよう授業を大切にしていきたい。民間プールの経年劣化の状況も踏まえ、先を見据えながら計画を進めていただきたい。
- 教職員の負担軽減は、「２時間」、「８．５時間」という数字以上に大きいと思う。また、先生がインストラクターの指導を間近で学ぶことができ、研修につながる。先生が他の学校に異動となっても活かされることになり、その点からも効果的な取組である。プールを使用している学校においても施設の老朽化などを見据えながら、可能な範囲で進めていただきたい。
- 啓成小学校のような新たな施設は当面使用していくことになると思うが、今後は使用する施設の区分けが明確化されていくと考える。先生の指導力向上の対策が必要であるほか、民間施設においては老朽化のみならず受入れキャパシティの問題もあり、状況は年々変化していくと考えられる。個々の学校の老朽化したプールは閉鎖されていく方向にあると思うが、最終的なゴールを見据えて計画を進めていただきたい。
- 体育が苦手でも水泳なら好きという子もいる。天候などで難しいこともあると思うが、子どもたちの水泳の時間を確保していただきたい。また、既存プールを使用する学校において、足元や日除けなどの暑さ対策を早急に進め、子どもたちの学びを止めないよう対応いただきたい。

### 【市長】

- 暑さ対策については検討を迅速に進め、今年の夏に間に合うよう対策を講じるものとする。
- 財政効果や施設の老朽化を見据えつつ、また教員が指導技術を失わないよう既存プールの活用と外部移行のバランスを検討していく。
- 水泳の時間は今後も重視する方針である。特に米子市は海に面した街であり、水泳授業は水の事故の際に命を守ることにつながることから、その教育的意義を十分に踏まえ、今後も継続していく。

### 【教育長】

- 視察において、当初懸念していた「水に入っている時間」を確認したが、長く確保されていて外部インストラクターによる指導は非常に充実していた。
- 教員の負担軽減については、単なる時間短縮だけでなく、精神的な側面も大きい。水位調節の作業は、神経を使う作業であり、教員にとって大きな負担となっていた。こうした作業負担が解消される点においても、相当な負担軽減につながっていると考える。
- アンケート結果も概ね良好であり、今後は米子市全体のレベルアップを図るとともに、事業実施校と未実施校の間で差が生じないよう取り組む必要がある。指導力向上のための研修も継続していく。また、室内プールを経験した教員の人事異動を通じ、インストラクターの指導手法が今後少しずつ広がっていくことを期待している。

### ■議事（3）コミュニティ・スクールの推進について

コミュニティ・スクールの推進について、所管課（生涯学習課）から資料3に沿って説明。

#### 【委員意見】

- 推進員のおかげで、地域住民が学校に関わりやすくなったと実感している。我々地域住民も関わりを通じて子どもたちから元気もらっている。また、地域住民からは、学校で一緒に活動できることを喜ぶ声もある。コミュニティ・スクールが活動の橋渡しを担うことで、地域側としても学校に関わりやすい環境が整っており、安心して参画できるとともに、子どもたちが地域住民を頼るという良好な関係性が年々積み重ねられており、こうした活動が継続できていることは非常に有難い。今後もこの取組を継続していただきたい。
- 学校運営協議会の委員の人数が増え、非常に幅が広がるとともに情報交換もできるような状態が作られている。地域の高齢の方が、コミュニティ・スクールで色々なイベントをやって小学生との触れ合いができて良かったと非常に嬉しそうに話をされていた。また、推進員が一生懸命つなぎ役をされていて、公民館祭りに中学生がボランティアで参加するなど、良い変化が見られる。今後は推進員のサポートや人材の確保が大切である。
- 「学校運営協議会」は学校と地域をつなぐ重要な仕組みである。かつては地域の大人は深い付き合いがなくとも子どもたちの顔は知っているという関係性が存在したが、現在は子どもの生活や声を知らないという希薄な状況にある。こうした時代だからこそ、コミュニティ・スクールという仕組みを通じて双方がつながりを持つことが必要であり、それが結果として「ふるさと教育」の推進にもつながる。人と人とのつながりが欠如しては、地域と子どもが互いに愛着を持つことは難しい。双方が「やらされている」と感じるのではなく、無理なく自然に、そして楽しめる活動を展開していただきたい。
- 地域住民が学校へ出掛けることで住民同士のコミュニティが形成され、楽しみながら活動できている現状がある。こうした顔の見える関係性の構築は、防災力の強化にもつながると考える。一方で、コミュニティ・スクールを今後10年、20年と継続させるためには、推進員の担い手確保が課題となる。今後、地域や市全体でネットワークを広げていく必要がある。現在実施している研修会に引き続き一般の方にも参加いただけるように、周知や多様な手立てを講じ、次世代の担い手や協力いただける方が一人でも多くなるような取組が必要である。

#### 【市長】

- 良い事例をとりまとめ、困っている他地域をサポートするなど、いろいろ工夫をしていきたい。
- 大人とのつながりが薄れる中、コミュニティ・スクールは新しい時代の仕組みとして機能し始めている。この仕組みや仕掛けを地域に組み込むことを意識し、継続的に交流が深まるよう取り組みたい。
- 運営の継続性を次のステップとして意識する段階に入り、具体的な取組などを検討していく。

#### 【教育長】

- 当初は学校の多忙化や地域の負担増に対する強い警戒心があったものの、運用が進むにつれて否定的な意見は収まり、活動の意義が浸透しつつある。
- 「地域学校協働活動と各校のカリキュラムの融合」については、活動の目的を明確化することが肝要である。これまで約5年をかけて、教育課程における特別活動などの位置付けや各行事の意義を整理してきた。今後はさらに3年程度をかけ、地域学校協働活動との整理・融合を推進していく方針である。現在は中学校一校をモデル校として先行実施しており、その成果を他の学校へ波及させることで、活動の狙いを明確にし、成果が得られやすい体制を構築していく。

○後継者については、全ての活動への出席を求めるのではなく、「年4回のうち1回でも良い」といった参加のハードルを下げる工夫をするなど、将来の担い手を見出していく必要がある。

■その他（1）家庭教育について

○2月に家庭教育の講演会が開催されることを歓迎する。学校や教育委員会において、学力向上、不登校対策などの多角的な施策を講じている中で、子ども自身の様子が変われば学校はより良くなるという視点から、就学前からの取組や「早寝・早起き・朝ごはん」「そだね運動」の推進は意義深い。これらの取組は一過性に終わらせず、コミュニティ・スクールと同様に長期的な視点で継続していただきたい。また、子どもの成長が米子の将来につながるため、息の長い活動となるよう期待する。本市の強みは、こども総本部の存在により教育委員会と福祉部門が分断されず、密に連携できている点にある。今後も福祉との連携を継続していくことが重要である。

【市長】

○不登校対策において学校側の努力に加え、家庭との協力関係の構築が不可欠であると考え。これまで家庭に踏み込むことに躊躇もあったが、今後は「早寝・早起き・朝ごはん」や「そだね運動」を軸に、家庭に対しても積極的な働きかけを行っていく。こうした生活習慣の定着が不登校の未然防止につながることを期待する。あわせて、「そだね運動」の展開にあたっては、地域に親しみやすい方言（「そげだね」など）を活用するなど、地域に根差した普及に努めていく。

■その他（2）大人と子どものイベント交流について

○昨年、米子ジャズフェスティバルのオープニングで中学生と大人が共演し、多世代の交流と子どもたちの達成感につながった。今後も大人と子どもが共に活動できる環境作りや支援をお願いしたい。

【市長】

○具体的な機会があれば共有をお願いしたい。市としても可能な限りの支援を検討する。

【教育長】

○逆に子どものイベントへ大人が出演する形での交流も、活動の活性化につながると考える。

■その他（3）探究学習について

○市長により積極的に働きかけていただいている中学生の探究学習について、大変素晴らしい活動であると考え。市長からの「ミッション」として子どもたちが主体的にまちを考える貴重な機会となっており、今後も子どもたちのワクワク感を引き出す仕掛けを継続していただきたい。米子のまちや日本を知ることは、将来外国へ行った際に異文化に触れ、改めてふるさとの良さを再認識することなどにつながると考える。

○地元のイベントや祭りに小中学生が参加する場を増やしていきたいと考える。米子への愛着を育み、進学等で一度市外へ出たとしても、将来的に米子へ戻ってくるような流れを作るための手立てを要望する。

【市長】

○部活動の地域展開において、伝統芸能などを取り入れられる仕掛けづくりを検討したい。また、中学生の探究学習は、郷土愛を育む教育の新しい形として継続の意向である。高校などでの事例を見ても、子どもたちに考えさ

せる機会の重要性を実感しており、地元定着につながるよう注力する。

**【教育長】**

- 現代の教育において、答えのない課題に対し周囲と協力して解決策を模索する力は、最も子どもたちに身につけさせたい力である。市長の発言を通じ、米子の子どもたちの成長の方向性を再確認できた。